



失敗から学べること

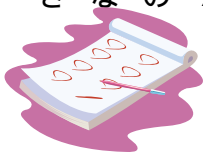
中3の12月、最後の模試の結果が返ってきました。目の前にある文字は・・・「E」(志望校を変更せよ)。

前月の模試と比べて、50点以上下がっていました。目の前が真っ暗でした。実は担任の教師からも、志望校を変えたほうがいいのではないかと既に言われていたのです。

しかし当時の私は、小6の時からずっと憧れていた兄と同じ高校へどついても行きたかったのです。なぜ今回こんなに点数が悪かったのか全く理由がわかりませんでした。そこで5科目初めて丁寧に模試を解き直してみました。

全科目共通することはお恥ずかしい話ですが、問題文をきちんと読まずに解いているためのミスが数多くあったことでした。次に科目別に見ていくと、英語・3単現のS、複数形のSなどのつけ忘れによるミス、数学・暗算が得意だったので途中の式を省略することによる計算ミス、国語・漢字や文法問題の知識問題の失点、社会・漢字の書き間違い、理科・計算問題のミス。

全て解き終わってわかったことは、ケアレスミスによる失点が、失点全体の80%以上あったということです。このケアレスミスを入試本番までになくさなければ、第一志望に合格できないかと思えました。



翌日から、自分の勉強に対する意識ががらりと変わりました。勉強している時、問題文を真剣に読むようになりました。そして、各科目勉強している時から、自分の弱点、例えば英語なら「3単現のS、複数形のSを付け忘れるな」「付け忘れるな」と自分に言い聞かせながら問題を解いていきました。

当時を振り返ってみると、当時ある程度勉強時間を確保していましたが、自分ではきちんと勉強していたつもりでした。しかし、よくよく考えてみると、12月以前の勉強はなんとなく問題文を読んで答を出していただけでした。特に難しい問題が出てきた時には、すぐにいらして落ち着きがなくなり、じっくり考えることも見直すこともせず、答が出たらすぐ答合わせをしておしまいという状態でした。教える仕事をしているとよくわかりますが、こんな状態では成績アップが望めるわけがありませんでした。

だから12月の模試の結果が悪かったことが本当に幸いしたと思います。どん底を味わったことで、本当にいろいろなことが見えてきました。

一丁目・模試の解き直しの重要性・・・模試を解き直すということは本当に抵抗がありました。なぜかというところ、自分が出来ていないということを見せつけられるからです。負けず嫌いな性格の自分にとって、模試の悪い結果は、自分の負けを認めたくないというような心境でした。しかし、初めて模試の解き直しをして自分の弱点がよくわかりました。普段の勉強では気づかないことをたくさん教えてくれました。そして、問題を解き直す重要性を再認識しました。それからは、問題集を繰り返すこと、出来なかつ

た問題を解き直すことを徹底しました。

一丁目・自分の弱点を意識する重要性・・・ミスは、ただ次のテストから気をつけようという考え方で絶対には直らないことがわかりました。自分の弱点を強烈に意識して、普段の勉強から直していこうと思わない限り、テストでも同じような間違いを繰り返すということが実感できました。

三丁目・勉強に対する意識が大きく変わったことです。「ミスをなくさなければ、絶対に志望校は合格できない。合格するためにはとにかくミスをなくすこと。」この意識が普段の家庭学習における自分の甘さを払拭してくれました。答を出しても、本当にこの答でいいのか、問題文を読み間違えていないか、計算ミスはないか、これでもかこれでもか自分突きつけていきました。このことが自分にとって本当に大きな転換点でした。

そして徐々にケアレスミスがなくなってきました。しかし1月、2月の私立入試の結果が散々でした。3校私立を受験しましたが、安全校の1校だけしか合格出来ませんでした。しかし今振り返ると、結果としてこれもよかったと思えました。「公立の第一志望に不合格なら、この安全校に通うしかない。でも絶対にこの学校には行きたくない。」だから必死に勉強しました。でも不安は不思議とありませんでした。なぜなら、どのように勉強すべきかはそこまでではつきりとわかっていたからです。そして最後まで頑張れたのは自分の力だけではありません。私立の入試が終わった後、兄からの適切なアドバイスがあったこと。同じ第一志望を受験する友人がいて心強かったこと。

担任の教師が自分のことを心配してくれたこと。親が口を出さずに見守ってくれたこと・・・等々。

入試を通して学んだことはたくさんありますが、途中で失敗することは決して悪いことではないということを感じました。逆に失敗から学べることはたくさんあります。本番の入試前に失敗するのはかまいません。本番の入試で力を発揮出来ればよいのですから。これから入試まで山あり谷ありですが、受験生の皆さん、入試を最後まであきらめずに頑張りましょう！

(白石)

志望校みつけた？

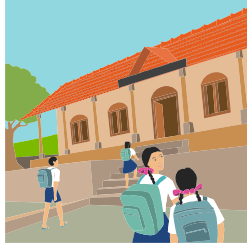
中学3年生はそろそろ志望校を決定して、本腰を入れ受験勉強を始めているだろう。中学1・2年生にとっても、中学3年生にとっても、みんなどつやって志望校を決めているのか？という疑問がないだろうか。友達の中には早々に志望校を決めて頑張っている人もいるのに、自分はやりたいことも見つからず、行きたい高校も決まらない。どの高校を見ても特にここだと思えない。

ちなみに私も中学生時代に将来のイメージもなく、高校選びは専ら偏差値基準だった。自分の偏差値がこのくらいだからこの高校かな？という感じで志望校を決めていた。だから特別その学校にこだわるわけでもないで、成績もそれほど伸びず、実際には決めていた高校より一つランクを下げて受験した。そういう意味では、しっかり受験に取り組めたわけではなかったのだが、唯一よかったのは、とりあえず宿題

やらテスト勉強などの、しなくてはいけないこととはきちんとしていた。そのおかげで、ある一定ラインより伸びなかったが下がりもしなかった。

「ここではもちろん最低限のことをしておけばいい」という話をしたいのではない。私ができなかった、というより知らなかった受験の捉え方や志望校の決め方を知ってもらい、私よりきちんと受験に臨んでもらいたいと思う。

そもそもなぜ高校に行くのか。もちろん中学校より高度な学習をするために行くのだが、それだけでもない。皆が行くから行く。社会的に高校は行って当たりまえになっているから行く。新しい世界を作りに行く。さまざまな意味がある。何を目的にするかで志望校選びも変わるだろう。しかし、高校に行くには入学試験がある。行きたいと宣言しただけでは入学させてもらえない。高校側が設定する、要求する学力が必要だ。それはやはり高校は、中学校より高度な学習をするため、の場所だからである。だから、制服がかわいいから、校則が緩そつだから、バイトしたい、部活したい、様々な理由の中で一番優先されているのが学力である。(専門学科に進む人、スポーツ推薦を希望する人はこの限りではない)



だから、いくら行きたい学校を選んで自分自身の学力とかけ離れていては大変だ。もちろん合格を勝ち取る努力も必要だが、1・2年生ならともかく、3年生は残り時間も考えなければいけない。偏差値も見ざるを得ない。その達成可能な圏内の学校で自分がどこを目指すのか、受

験するのか、それを決めることが必要だ。

しかし、それ以外の理由も必要だ。特にこれから勉強を頑張る目標を達成しようというとき、気持ちも大きな影響を及ぼす。好きな先輩が通っているから、部活に入って活躍したいからなど、これからの勉強を頑張る動機が必要だ。何も感情が動かない志望校だとこれからの受験の追い込みを自分にかけるときの勢いが出ない。自分の気持ちがその志望校に向かないといけない。だから見学に行くのだろう。見学に行ったら自分が目指したいと思うかどうか。思えなければ受験校を考え直してもいい。行ける学校ではなく、行きたい学校という見方も大切だ。そのどちらもかなえる学校であれば受験校としては申し分ないだろう。各人がそれぞれの志望校を見つけ、これから最後の受験勉強に後悔しないよう取り組んでもらえれば、それを達成するために応援する我々も幸せだ。(松永)

知るといふことは II

ある日の仕事帰り、電車の中で、私はある中吊りの広告に目を留めた。それは、「核のゴミ展」と題された意見広告であった。核兵器廃絶の話かと思いきや読み進めると、果たしてそうではなかった。

そこにあった「核のゴミ」とは、原子力発電所で生まれる放射性廃棄物のことであった。原子力発電で使われるウラン燃料は、燃えたあと高レベルの放射能を持った廃棄物へと変わる。近寄っただけで即死するほどの放射線量を発するその高レベル放射性廃棄物の最終処分方法

は、地下の奥深い場所で、無害になる(放射線量は時間が経つと減衰していくため。例えばプルトニウムであれば半減するのに二万四〇〇〇年。)まで保管しておく以外にはないのだが、その最終処分地がなかなか見つからない。さて、あなたは「環境問題」を見て見ぬふりするのですか。書かれていたのはそのような内容であった。

私は、目を疑った。本当に驚いて、啞然とするほかなかった。そのような事実を初めて知ったから、ではない。私は、二十四年前の或る出来事によって、「核のゴミ」の存在を知っていた。一九八六年四月、旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所が爆発事故を起こした。日本にも放射性物質が降下するほどの事故であった。このことをきっかけに、国内では原子力発電に反対する世論が形成され始めていた。当時、安全性に対する不安とともに、その論拠として挙げられたのが、先の放射性廃棄物の問題であった。たとえ事故が起ころなかつたとしても、放射性廃棄物は増え続ける。これでは、子供たちに負の遺産を残すことになるのではないかと。

当時、それに対する回答こそが、「地層処分をするから問題ない」というものだった。我々が責任を持って候補地を見つけきちんと処分する計画をしていますから心配はいりません。原子力発電を押し進める立場の人々は、廃棄物問題について異口同音にそう主張するのだった。

あれから、長い時間が経ち、当時の反原子力発電の運動は一種の熱病のように、次第に鎮静化していった。世代も入れ替わった。そこに、冒頭の広告である。

なんといつの間にか核の「ゴミ」の責任が、

我々に転嫁されているではないか！我々の無関心が、この問題を放置してきたというのである！無茶苦茶な話だが、いきさつを知らない人はおそらくこの話を鵝呑みにするだろう(結果から言えば、そのような「ゴミ」を受け入れたい自治体はどこにもなかった)のである。しかも、地層処分の期間は五〇〇年以上にわたる。室町時代から現代までの社会変動を考えてみれば、一元的な管理をする機構を設立することすらあまりに非現実的である。

但し、ここでお伝えしたいのは、原子力問題の是非ではない。私が目の当たりにした、情報を持たない人々が、情報を持つ人々によって、簡単に誘導され、利用されるという現実である。知らないということ、情報を一方向でしか見ることができないということ、無関心であること、それらは知らず知らずに私達を不幸にする。そういう時代なのだ。裁判員制度はついに極刑の選択までも、市民の判断に委ね始めている。しかし、違う視点や情報が与えられるだけで、判断基準が大きく揺らぐのが人間の性であって、その重圧は、もはや他人事などとは呼べない。

そのように考えるとき、これだけの情報化社会の中で、本物とまがいものを取捨選択する能力も、「生きていく力」に他ならないと言えよう。(関)



▲継続希望の方へ▲

- ▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡下さい。